



研究

宗教の本義

中村 凡 愚

高祖棲神の靈場、宗門總本山の學窓としての當學院が、専ら佛學に重きを置かれてあるのは當然のことで、宗門子弟の爲に喜ばしき次第であるが、同時にそれ等宗乘台乗を究むる上にも一般的な宗教上の智識、即ち宗教常識とも云ふべき基礎觀念を養ふて置く必要もあると思ふ。これが缺けて居ると、折角深遠な佛教々理も何の點が深遠であるか、高大な本化教學も何處が卓拔してあるかを捕捉し難い憾みを免れぬ。で、私はこう云ふ方面の學問的の造詣は勿論皆無ではあるが、只自分で少しく考へたり二三讀み味つたものゝ中で思ひ附いた、極めて通俗な問題に關し述べて見たいのである。幾分でも諸子の參考ともならば幸甚と思ふ。

こゝに題して宗教の本義と云ふ、宗教とは如何なる意味のものか、完全なる宗教とは如何底のものでなければならぬかと云ふことに就ての所見を述べんとするのである。

世には今尙宗教の無用を説く人がある、宗教無用を叫んだ時代は既に過ぎたのであるが、一部の科學者や哲學者の中には今も學問の萬能を信じて宗教を無用視せんとするのである。而も一般的に識者と呼ぶるゝ人々が次第に宗教の必要を認め來つたのは事實である。が、然しその多くが宗教の本義に對し正當の見解を有せぬ所から、その必要を説くにも甚だしく見當を逸して居る邊がある。それ等の人々は宗教を或る種の手段として、例へば宗教が下層社會の慰安又は風教維持の上に効果があるとか、或は國民道德を鼓舞する上に有力であるとか、或は各自が品性修養の上に効力があると云ふ様な意味でその必要を認むるので、宗教を何等かの目的の爲め手段としてその必要を云々して居るのである。これ等は一種の宗教利用論者と

云ふべく、斯る意味に於てのみ宗教の必要を認むる識者——爲政者教育家は自ら深く宗教の何たるかを味解せず、自ら進んで宗教的の經驗に觸れやうともしないで只その社會上に現はれた効果を見て漠然そが必要を感じ、只社會政策上有利なりとして一般にそを弘布せしめんことを圖るのであるが、而も自ら宗教其物の妙味に接しないで他をしてこれを信せしめようとしても、そは何等宗教の本面目が發揮されよう筈があい。今日世の識者と呼ばるゝ人々が自ら卒先して敬虔なる求道心を喚發せんことを切望して止まぬ次第である。

識者と云はるゝ人々に於てすら斯く宗教の本義が了解されてゐないのであるから、一般民衆がそれを正解せぬのは無理からぬことである。宗教信者と云はるゝ者の多くが何か現前の利益——病氣平癒とか商賣繁昌とか——を得んことを目的として神佛を拜し、又は未來の安樂を得んために念佛するとか、又は膽力養成乃至煩悶慰藉を目的として禪を行ずると云ふ様な風で、これ等も矢張り或る

種の願望を満たさんために宗教を道具とし信ずるに過ぎないのである、信者なるものに於て然り、況んや他の大多數は只だ習慣的、惰力的に神佛を拜するか、又は殆んど宗教に對し無關心なる無宗教徒を以て充たされるので、現代は一面特に甚だしき無宗教の時代と云はるゝのである。

宗教は人心の最も深い要求であり従つてこれに依つて全心の大満足が得らるゝので、其結果個人的にも社會的にも種々の効果が現はるゝのは必然である。然しそれは宗教的信仰の結果として自ら現はるゝので謂はゞそれは信仰其物の副産物である斯る副産物を目的として斯る目的のために宗教が必要なのでなく、宗教の必要はそれ以上モット重大の目的のために必要である。否宗教はそれ自身が目的でそは他のものゝ手段として存在するのでなく、宗教は宗教として人々の心底に有する宗教的要求、即ち宗教心を満足せしめんために存在し又必要なのである。

物質的、肉體的的要求は暫く措き、精神的の諸

種の要求は全心の満足を得る宗教に來らねば結極の満足は得られぬので、學問、藝術、道德等も宗教の天地に入り宗教の基礎の上に立つて始めて眞に貴い價值が現はれるのである、而もこれが爲に學問や道德を成就するため手段として宗教を要すと思ふならば、全くそは主客を顛倒した考へと云はねばならぬ。學問や道德乃至諸他の要求は人心の部分々々の要求で、夫れくの方面に於て持異の必要がある。それ等各方面の要求を統合して全人格の統一完成を來さすのが宗教で、宗教的要求あるものは人心一部の要求でなく實に人格の大なる統一の要求、根本心の覺醒、自己全体の満足を欲して起る根本要求に外ならぬ。

人間には種々の要求がある。衣食住の要求、財産、地位、名譽乃至學問、娛樂等數へ切れぬ要求を持つて居る。吾人が生きると云ふことはこれ等諸種の要求を夫れくゝに充たさんとして勞作するの謂で、人間の一生乃至全人生あるものは斯る要求實現の連續と云ふべきである、然るに吾人はこれ

等要求の起るがまゝに一々それが充たされるかど云ふに、場合に依て或る程度までそれが充たされることもあり、勞して効なく少しもそれが充たされぬ場合もある、人々がその要求の充たされぬ場合不幸を感ずるは云ふまでもないが、適々それが充たされた時一種の幸福を感ずる、然しそれは何時迄もその幸福を持続し得ない、そして又その充たされた幸福が眞の幸福でなく反つて自己の破滅を來すの不幸であることが多い。所謂幻に似たる幸福、そしてその幻の如き幸福はやがて苦を招くの繫縛たるのである。吾々は無限の要求を有するにも拘らずその一分をみたさずさへ容易ならざる苦難であるから、到底其全部を充たすことの不可能なるは云ふまでもない。偶々その幾分を充たしてもそれが一時の幻であり、同時にそれが苦縛であるとしたら吾々はこの刻々に起り來る諸要求を如何に處理すべきかと問題である。吾々が凡ての要求を絶滅したからば一番世話なしであるが、それは大なる無謀で實は不可能に屬する。そこで吾等

は先づ衷に省みてそれ等一々の要求を吟味しその如何ある要求が正當であるか、そしてそれを如何にして如何ある程度にみたすが合理であるかを考慮すべきである。

吾々の凡ての要求なるものは個々隔絶せる孤立的のものでなく、一々が他の要求と連絡を有する体系的のものである。諸種の要望が各自の性格に基いて起り、様々の形を取つて現はるゝが、而も如何なる要求と雖も、畢竟するに各自の生命の充實、生存の保全に資せらるべき筈である、諸種の要望は此根本の一事を完うせんために派生されたものではあるが、而もこの生存の目的を忘れて一切を隨時起るに任せてそをみたさんとするとき、そは方向を失へる盲動として反つて生存の目的に違反しそを危くするの不幸に陥るのである。こゝに於てか吾々は諸種の要望を批判し調節し統禦する中心の力を得べくこゝに人格の統一を要するのである。統一を缺ける人格は根柢なき浮草の様なもので、風のまにまに周囲外界の見聞に動かされ

つゝ徒らに五慾の奔命に勞れ終るのである。無意味にして危険あることこれに過ぎたるはない。

吾々はこゝを以て自己の人格統一に依つて現下の生存を完うせんことを希ふと同時に、その生存をして無限に豊富ならしめ價值あらしめんことを欲し、自己の生命を無限に擴大し永遠に存續せしめんとこの己み難き希ひがある、而も吾人は有限の存在で智識も能力も有限であり不完全不自由である。吾々の身体生命は電光石火の如き果敢ない無常の身であるを思ふとき、堪へ難き自己の弱小と孤獨と寂寥とを感せず居れぬ。そこでこの有限の身を以つて無限の存在に合致せんことを欲し、自己と周圍人類乃至全宇宙との奥底に大なる根本の統一的大生命を發見し、それと一如同化して無限の生命に連り確固たる實在的根基に依據し安住せんとするの要望抑ゆべからざるものがある。宗教的要求とは實にこれに外ならぬのである。他語を以つて云へば吾人が動搖浮沈定めなき不安の生を去つて自己と萬有とに由つて來る根本の大生命

を把捉し、自己の存在の確固不拔ある根柢を覺得して眞實に生きんとする根本要求が眞の宗教的求道心である。宗教とは斯る人間最深の要求に答へんとして起つた人生の一大現象である。

自分に取つて自己の存在てふことが最も直接であり、同時にそが生きると云ふことが根本の事實である、生きると云ふことは何のために生きると云ふ様ち或る手段のためであく、實に生きんと希ふ自己本來の要求に基く以外の何物でもない、人道實現のためとか、各自の使命遂行のためとか云ふのは生きると云ふ其事の意味を表明したもので道のために生きると云ふのは道あるものが目的でそれを體現するの手段として生くるのでなく、生きる其事が道を求め道を行ずるてふ高尚な意味を持つたものでなければならぬのである。吾々が道を求めんとするのは最も價值ある最も正當合理な最も充實した生き方を要する故にこそ其當然の道を求むるのである。宗教的要求は實に斯る最も直接で最も根本的ある自己其物の確立、大生命の獲得

(生存の價值を高め深めそして眞に生き強く生き大きく生きんとすこと)を希求する所に起るのである。宗教は只宗教心のためののみ大なる必要がある。

諸種の要求はこの根本要求の満足を待つて始めて一切が醇化され靈化されて夫れ〳〵の意味と價值とが認められ、そしてそれを欣求するに當てその行くべき當然の方途を發見し得て、極めて無理の無い自然の努力に依りそを實現し充たし行く一歩々々の上に限りなき感謝と喜びを得るのである。上來宗教的要求あるものゝ性質を述べ終つたので以下更に宗教上の二三要義を述べ、完全ある宗教が具備すべき諸要素に就いて語らう。(未完)

■接諸大衆と皆在虛空

亮

遠

うちあふくみ空のみこさやかなり

われも雲井にいつのほりけん